バハイの俳句と注釈

石原　要子

タイトルの注釈にはいる前に、俳句を通しての自然観、人生観に少し触れてみたい。

人生は旅であるとし、旅を栖（すみか）とし、旅に病み、旅に死んだ芭蕉の跡を偲び、百年たった今も、奥の細道は、芭蕉を慕い、その心に触れんと、旅路を巡る人々は後をたたない。

西洋と違う日本の自然観

春立から節分、そして春隣と、二月に入ると春待つ心をさまざまな言葉で、先人達は伝えてきた。

太平洋が小春日和の頃、日本海岸ではよく時雨る。時雨の語は「過ぐる」から来たもので、サーッと来て止む通り雨のことである。この晴れと雨が、光と陰であり、五月雨（さみだれ）と共に、日本人の情緒によくとけ込み、俳句でもこの二つの季語はよく詠まれている。季節に対する美意識は、日本人の思想を形づくる大きな要因となっている。俳句は極端に短い形式の文芸であるので、読者の理解を得にくいという宿命を負っている。そしてまた、白、黒と割り切らず、多分に曖昧さを認める思想でもある。

日本人の思考は、ジャンケン遊びに例えることができるのではないだろうか。敗者と勝者がスパッと二分されないで、三つ巴となる点が、日本の勝敗の図式ともいえる。西洋思想はテレビ型、日本思想はラジオ型といわれる所以である。

西洋と違うもう一つは、天候や自然に対してすこぶる楽天的である。「今日はお天気で・・・・」といえば、もちろん晴天を意味する。ところが、英語のウエザーは、悪い天候の意味が底にある。

日本人は例え悪い状態になっても、何とかしのごうと考え、天候や季節を楽しもうとする。しかし西洋においては、自然は人間に対して厳しいことが多く、身構えて生活しなければならない。

俳句に代表される、物事を限定しないで暗示する手法は、カラヤンの指揮にみる「統率」よりも、楽団員達の雰囲気を醸し出す。暗示的な身振り、手振りに表されるように、また写実から抽象へと移行してきた絵画の技法にみるように、最も効果的な手法として、「暗示」は、見る人、聞く人に、さまざまな想像を思い起こさせるのである。

「日本の美意識」ドナルド・キーン著、この本の一説に、－－－西洋人は芸術的不滅を望み、滅びることを知らぬ大理石で記念碑を立ててきたが、それさえ崩れることを知って涙した。だが－－－日本人は滅びることを見越して木の建物を立てた。たったこれだけの引用で、私たち大和民族が大事にしてきた暗示。芸術や建築物だけでなく、草や木、風のそよぎにも、その心を見ることができる。パッと咲いて散る桜に寄せる愛惜、滅びやすいものに対するいとおしみの感情は、西洋的な美とは異なった、独特の美意識、伝統を教えてくれている。

しかし、悲しいことに、先祖から受け継いだすばらしい、こうした美意識は、時代と共に失われつつあるが、自然の中で生き、人間も自然の中の一部と考えるとき、自然に人格や心を認めることは、宗教心と無関係ではなく、こうした生活意識は、地球を守る番人としての

誇りとすべきではなかろうか。
バハイの教えを通して、俳句にその魂を表現できるようになるのは、生涯をかけてもなかなか実現は難しいと思うこの頃ではある。
バハイ学術の場に、自分の作品を発表することなど思いもかけないことであったが、私の人生はすべてバハイを通して始まる！　この意味付けを改めて自分に問うきっかけとなった。

春夏秋冬の季節にそって並べてみる。「　」の部分が季語。

春　　「囀」（さえずり）は　万国語なる聖樹かな
一九七八年十一月、巡礼者として初めて聖地を訪れた。バブの廟の裏手の茂りの中で、一人祈りの本をひもといたとき、美しい小鳥のさえずりを耳にした。天使が唄っているようだとしばし刻を忘れる。日本の小鳥達と同じ音色、これこそ万国語だと思った。

聖地への一歩に「ばら」の匂いけり
バハオラの廟も、バブの廟も香り高いばらの香りに満ちあふれていた。ハイファの丘の家の垣はブーゲンビリアの紅があざやかに咲き、ばらの芳香は今も脳裏を去らない。

飽食と飢餓との地球「春寒し」
「囀」に野外礼拝始まりぬ

夏　　「星涼し」聖地の国はネオンなし
テルアビブの空港は、砂漠の中にあった。荒涼たる景色を想像していた目に、オリーブの林が散見され、スプリンクラーが時間毎に散水するのに驚いた。夜、金色のバブの廟が地球儀のように浮かぶ。そこには喧そうのけばけばしいネオンもない。大きな星がまたたくのみ。

聖堂の道に物乞う「跣」（はだし）かな
インドに、礼拝堂が建立、その式典に参加した。地平線の涯まで聖地である。日本人の感覚と違って、インドの人々はおおらかである。門から一歩外に出れば公の物であり、聖地といえど、堀の廻りには家なき人々が群れをなしている。

国貧し聖地の子らの「跣」かな
泣かす子も泣く子も「跣」ユダの民
母と子の教室は別「夏期講座」

秋　　「身にしむ」や鳥の交はぬ地と聞けば
バハオラ一行が閉じ込められた牢は今精神病院となり、地中海を臨む一画にそのまま残されている。小さな鉄のベッドか一つあるきり、私たちが訪れた頃は、毎日しぐれた。地中海もアッカの町もすべて灰色の景色に暗く閉ざされ、アッカの地に流された罪人は、二度と自由の天地に帰ることは、許されなかったと聞く。鳥でさえこのアッカの空を飛べば落ちて死ぬと、恐れられた場所が今聖地となる。

「白露」の寝墓に供華のなかりけり

九日間の巡礼の八日目、聖地に眠る藤田氏の墓を詣でた。一様に質素なコンクリートの寝墓には、色彩の花はなかった。日本から来た六名は、心の花束を、祈りに託すのであった。

澱（よど）まざる同時通訳「爽（さわ）」やかに
地中海向きて「ザボン」の撓（しない）けり

冬　　殉教の広場の泉「涸（か）れ」にけり

殉教の広場という固有名詞がある場所ではないが、バハオラがアドリヤノーブルの流刑地から船でアッカに送られた。くずれかけた門を入ると建物が、広場を取り囲むようにあって、当時あるいは噴水の泉が涌いていたのではないかと想像されるが、今はすっかり涸れ、寒々とした光景であった。

夜明けごろ聖堂急ぐ「ショール」かな

いよいよ聖地を去る日が来た。月が変わって十二月初旬、朝六時の開門はまだ暗く寒い。感謝と別れの祈りを心静かに終え、バブの廟を後にしたとき、突然涙が嗚咽となって、ショールで顔をおおい立ち止まった。ちょうどそのとき同じ巡礼の年若いドイツの女性が廟に向かっていたが、無言で私の肩をそっとさすってくれた。暖かい彼女の手の温もり、黙礼する私に、玉砂利の音が去っていった。

ひれ伏して長き祈りや「息白く」
「セーター」のリーチ懐かし壁写真

俳句では、季語が重要な部分を占める。季語が動くことを最も嫌う。感動を表すときに、「・・・・や」という切れ字を使って、自分の気持ちを強く表現する。句の終わりに「かな」「けり」も同じ表現であり、又余韻を意味する。また、「匂い」は匂ひ、「物乞う」は物乞ふというように旧仮名使いとなる。やという切れ字を使ったときは、終わりにけり、かなは用いない。などの約束ごとがある。